

特選
2020
日本PTA全国
協議会会長賞

第53回「おかねの作文」コンクール

社会との繋が^{つな}りであるお金

滋賀県・滋賀大学教育学部附属中学校 2年 坂井 悠希子

「お金が欲しい……。」

私はいつもこう言っている気がする。もはや口癖だ。そして私だけではなく多くの人がこの言葉を口にする。しかしふと思った。なぜ私はそんなにお金が欲しいのだろう。まず思ったのは、友達と遊びに行きたいからだ。遊びに行くには交通費、食費などたくさんのお金がかかる。そしてお金があれば遊びに行く場所やご飯などの選択肢が広がる。これは遊びに行くことだけには限らない。大学に進学したり、好きなことをしたりするには多額のお金が必要である。もちろん、お金で買えないものもたくさんあるが、お金があれば人生の選択肢が広がることは確かだ。

しかし、こんなに人生において大切なお金もよく見れば紙幣はただの紙切れ、硬貨は金属の塊だ。昔のお金である貝殻が今の私たちにとってただの貝殻でしかないように。ではなぜお金は存在しているのだろうか。今着ている服も、使っている文房具も、自分一人の力だけで作ったものは一つも無いように、人は一人では生きていくことができない。だから物を交換する必要がある。しかし物々交換は不便だ。まず生鮮食品は腐りやすい。腐ってはそのものの価値は失われてしまう。そして交換相手は自分と交換したくても、相手が必ずしも自分の欲しいものを持っているとは限らず、またその逆もある。しかしお金は腐らず丈夫だ。またお金は野菜や魚などと違い、みんなに価値があるものなので、誰とでも交換することができる。だから物同士で交換しなくても、お金を通して取引することで、お互いが欲しいものと交換することができる。このように、お金があることによって、上手く他人、社会と繋がることのできる。お金の存在意義は社会と繋がることにあるのではないだろうか。

そんな社会と繋がるためのお金には二種類の使い方がある。それは、自分のために使うお金と人のために使うお金だ。同じお菓子を買う場合でも、自分の

おやつに買う場合と、プレゼントや家族のために買う場合がある。私はもともと自分にも、他人にも、お金を使うことが好きではなかった。お金はお菓子を食べたら無くなるように、使うと無くなってしまおうと思っていたからだ。しかし、昔母はそんな私にこう言った。

「お金は回るものなんやで。あなたが使ったお金はそのお店の人の給料になって、もしかしたらそのお金でお父さんの塾に来てくれるかもしれへんやろ？」

私ははっとした。お金は使ったら無くなるものではなく、回っていくものだったのだ。今、新型コロナウイルスの影響で、飲食店を始め多くのお店は休業や時短営業をしなければならず、私たちもあまり旅行などに行けるような環境ではない。私は旅行などに行かない分、出費が減ってお金が貯まる^たと思っていた。しかし現実には多くのお店は倒産を余儀なくされ、運良く両親の会社はこの影響を受けない職種だったが、給料を減らす会社も多く出ていることも知った。このことからお金は貯めているだけでは逆に貧しくなってしまうという、お金を使うことの大切さを学んだ。

私たちはよく、どうお金を貯めるかを考える。お小遣いを増やしてもらうために交渉したり、少しでも安いものを買って節約したりすることなどだ。しかし、本当に大切なことは「どう貯めるか」より「どう使うか」なのではないだろうか。お金は社会との繋がりだ。自分のためにお金を使う買い物一つとっても、自分が応援したい会社の商品を買ったり、少し高くても環境に良いものを買ったりすることで応援となり、金額としては小さいものかもしれないが、お金を通して社会と繋がることもできる。また、それは選挙権のあるなしに関わらず、投票のように自分の意思を間接的に社会に伝えられるものだ。他にも、人のために使うお金である募金も社会との繋がりだ。しかもお金は県も国境も越えて繋がるができる。

今、社会はキャッシュレス化が進み、お金の形は変わってきている。しかし、お金の形が変わっても、お金が社会との繋がりだということは変わらない。だからこそ、一人ひとりがお金を「どう使うか」について考えていくべきであるし、「どう使うか」を重視した教育を行っていくべきではないだろうか。そして私も選挙権はまだないが、お金を通して社会と関わっていきたい。